

三越趣味に就て

泉鏡花作

明治四十二年四月

さあ、私は金を澤山ふところに持つて三越を觀察した譯ではないから、或は批評する勸利が無いかも知れない。けれども、とに角聞いたり見たりした上で私の考へで言ふと、三越と言へば先づ流行の中心、伊達の眞中となつて居るやうに思ふ、ところでこの伊達や流行といふものは、悪くすると虚榮の眞中となつて仕舞つて、實質よりも單に見かけを重んずることになり易い。三越なども、品物とか柄とか、色合とかを精選するよりも、すべて見て好いといふ方に重きを置く傾きがあるんぢやないか。

色にしる、柄にしる、品物にしる物の純なるものは品少なで、間の混合物が多い。だから昔から決つた物を買ひに行くときつとない。縮緬にしても、お召のやうな決つた物は兎に角、其他の物には「純」といふことを言はれぬ物が多い。一樂にしても本當

に唯の一樂は少なくて、妙な織り方をした物をよく見せられる。又八反があるかと言つて見ると、是は役者の下着になるやうなものばかりで、どうも高尚なものに乏しい。なる程さういふ物は一寸見たところは好いが、地が早く弱るとか、色が褪め易いとかで、眞に實質を備へた純美なる物が少ないやうだね。

尤もさういふやうなものが一般の嗜好で、その趣向に投ずる爲にそんなやり方をするのかは知らないが、然し苟もあれだけの設備をして天下に鳴り、時好を作る勸威を持つて居るならば、進んで客の爲に謀るといふ見識も具へて居なければならぬと思ふが

一 對呉服屋といふものは、此方から好んで行つて買ふ場合は兎に角、さもない時に客からこりやどうだらうねと言はれると、えゝそりや結構でございませす。當節の流行で、地質と言ひ、色合と言ひ、申分はございませんといふ。又他の品を取つて、こりやどうだらうねといふと、又えゝ結構です、餘程お似合ひ申して居りますなどゝ同じやうなことを繰り返

す。

是れ全く客の爲を思はず、眼前の利益に執着して居るからで、それも小さな店ならば兎も角、あの位の勸威を持つて居るものは、其人の顔付なり、容子なりを見て、それは年に似合はないとか、あまりはで過ぎるとか、其の方はけば／＼しくてをかしとか、何とかさういふやうな深切氣がなくてはすむまいと思ふ。

色合にしても、晝見ると夜見るとは違ふ。電燈の光と、ランプの光と、ガス燈の光と皆違ふ。さういふ物を一々研究して置いて、客の爲に進言する位の深切が、三越にあつてほしい。

何しろ總てのやり方がハイカラで、はで／＼しい。實質と深切ともに足りない點がないかと思ふ。それで徒らに呼び聲を大きくして、入らつしやいぐと言つて居るやうな感がされる。少くとも私には然ういふたやうな心持がする。一體着物といふものは、其人の年頃なり、顔付なり、容子なりとシツクリ合へ

ば、それがいかにも必要品の如く見えるものだ。然るに三越物だといふと、何だか贅澤品のやうな気がする。それはなぜかと言ふと、三越のやり方がはで、年に不釣合な着物を進めるから必要品の如く見えないのである。必要品の如く見えないから贅澤に見える。

他の装飾品なら兎も角、着物は身分相當、年齢相當に着て居れば、決して贅澤物には見えるものではない。だから仕立屋などに持つて行つて、十七八の女の着るやうな物が三十女の着物であつたり、二十位の女の着るやうな物は四十女の着物であつたりすると言つたことを言はれるやうな滑稽は演じさせて貰ひたくないのだ。――老貴婦人などによくさういふのがあるからなあ

あのいつか賣り出した三越のヴェールの如きは、一部の人には歓迎されたかも知れないが、日本の女にはどうも向かないね。寧ろ滑稽だ。私はいつか新橋まで人を送つて行つて、その群集の中であれを被つた日本の若い女を見たことがある。そのスタイル

がいかにも泰然としたものであつた。然しながら、私共の類にはある種の微笑が漂つた！ 恐らく賣る人　　三越　　の方から見ても、日本の女のヴェールをした姿を餘り好いとは思ふまい。私はどう考へても、さういふ事が、あの位の力ある店のやり方としては、完全なる見識とは思はないね。少くも半分は三越といふ名で賣つて居るやうに思ふ。換言すれば、三越で買ふといふ事に興味があつて買ふので、果してよく品物を選んで買つて來るかどうかは疑問である。若し三越を作物の上に應用すればどうするかつて？ さあ、先づ今のところ虚榮家の　　喜劇としてですかえ　　いや、是は然し、豫て女子供にせびらるゝ苦しさが變な方面に勃發したかも知れない。

(談。)